

生死をめぐる第三の環

——『生死』を読み解くために——¹

松田智裕

はじめに

1975-1976年度にデリダが ENS で行った講義『生死』（全 14 回）では、そのタイトルが示すとおり、生と死の不可分な絡みあい問われている。ところで、この講義を理解するうえで、大きく分けて二つの軸があるように思われる。

ひとつは、デリダにおける「生と死の絡みあい」という主題の位置を知る手がかりとしてこの講義を読むという軸である。生と死の絡みあいというテーマ自体はフッサール現象学における記号の問題を論じた『声と現象』（1967 年）のなかにすでに見られるが、1970 年代の著作や論考ではこの主題が後景化していることもあって、『声と現象』のような 60 年代の著作とそれ以降の著作との連続性には不透明な点多かった。これに対して、『生死』ではニーチェやフロイト、ジャコブやカンギレムといった多様なコーパスをとおして生と死の問題が考察される。とくに、ジャコブとカンギレムを論じた箇所は長らく非公開だったこともあり、この点で『生死』は前期以降のデリダにおける生と死の問題を考える貴重な資料という側面をもつ²。

もうひとつの軸はこの講義の背景にある、哲学教育をめぐる当時のフランスの政治状況である。当時デリダは「哲学教育研究グループ」（以下、GREPH と略記）をとおして、ジスカル・デスタン政権による教育改革案への反対活動を行っており、編者が述べるように、こうした GREPH での活動が『生死』の文脈にある（VM, 11/11）。事実、講義の第 1 回では、アグレガシオン試験の制度を「このセミナーの——脱構築されるべき——対象としたい」（VM, 25/25）と語っており、この点で『生死』は学校教育をめぐる当時の政治情勢のなかで彼がどのように哲学教育とその制度を問い直したのかを探るための重要な資料でもあるということになる。

本稿ではこうした二つの軸を頭の片隅におきながら、この講義全体の構成、そして筆者が翻訳を担当した第 11 回と第 12 回の内容を紹介することで、『生死』の射程を考えるための論点となり

¹ 本稿は、2023 年 4 月 22 日に開催されたワークショップ「ジャック・デリダ『生死』を読む」（主催：脱構築研究会、科研費基盤研究（C）「20 世紀後半のフロイト派における構造概念の用法と応用精神分析の展開の解明」（研究代表・佐藤朋子）、金沢大学）での発表に基づくものである。有益なコメントをくださった各氏には記して御礼を申し上げる。

² 『生死』講義を軸に、生物学的な意味での「生」だけでなく、社会的な次元での「生」も視野にいれながら、『声と現象』から『生死』を経て『ならず者たち』の政治論にいたるデリダの生の思想を一貫した視点から辿った研究として、吉松覚『生の力を別の仕方でも思考すること——ジャック・デリダにおける生死の問題』、法政大学出版局、2021 年がある。

うるものを考えることにしたい。

『生死』の構成と主要論点

まず、講義の第1回に依拠しながら、『生死』全体の議論構成を簡単に概観しておこう。

第1回は、「生と死」と言われるときの「と (et)」がなにを意味しているのかと問うことから話が始まる。こうした話の切り出し方は、この講義がアグレガシオンの受験生向けの授業であったことと無関係ではない。编者によれば、1976年の哲学のアグレガシオン試験の主題 (sujet) として予告されていたのは「生と死 (la vie et la mort)」であったという (VM, 12/12)。試験では、課された主題の意味やそこに潜む問題を自分なりに説明することが求められる。それを見据えてデリダも主題の意味を吟味することからはじめる。曰く、「生と死」と言われるとき両者の関係は並立を意味するのか、対立を意味するのか。それを並立ないし対立と捉える場合、生と死はそれぞれ別個に存在するなにかということになるが、はたして両者の関係はそうしたもののなか——こういう具合に話を切り出すことでデリダは、一応は試験の作法に則って、問いの立て方を自ら実演するわけである。そしてこの主題の意味をひとつとおり論じたあと、彼は講義で扱う内容を3点にまとめている。

① まず、「生と死」というアグレガシオンの主題に「生死 (la vie la mort)」という言葉を対置することで、講義全体の方向づけが行われる。「生と死」という主題の「と」を並立 (juxtaposition) や対立 (opposition) と考える場合、そこには死との関係をとおして生が自己を措定するようなヘーゲル的な定立 (Setzung/position) の論理が作動している。しかし、デリダによれば、生や死は「もはやこの定立の意味における何ものかではないような何ものか」 (VM, 20/20)、つまり定立の秩序に属さないようななにかを示している。このように、対立や矛盾によって自己と他が総合されていく同一化のプロセスに属さないものを指示するために、デリダは「生と死」という主題から「と」を取り去り、「生死」という表記を提案する。そして、生命を自己の再生産かつ根源的な分割 (Ur-teil) として語るヘーゲルの『大論理学』、さらにジャコブの『生き物の論理』を中心に、生死という問題の輪郭を素描することが予告される。

② さらにデリダは、「生死」という言葉で問題になるものを別の角度から語り直すことで講義の狙いをあらためて説明している。彼によれば、たしかに自分は並立や対立の関係にはない生ないし死の関係を検討しようとしているが、だからといってそれは生と死を同一視するためではない。「生は死である (la vie est la mort)」と言う場合、それは「である (存在 : être)」を介して生と死という対立物を総合するという図式になってしまう。むしろ、そうした図式とは異なる「他なる論理」 (VM, 25/24) を模索することはできないか。その可能性を一方ではハイデガーのニーチェ解釈、他方ではニーチェとフロイトにおける「彼方／彼岸 (Jenseits)」の問題をヒントに、検討していくと予告される。

③ 最後に「プログラム (programme)」という語をとおして、講義のメインテーマである生死が学校教育に関連づけられる。現代の生物学において「プログラム」は、有機体の増殖 (再生産 : reproduction) を指令し、遺伝現象を構造づけるシステムという意味で用いられる。ところで、「プ

プログラム」は大学制度を記述するうえでも用いられる言葉であり、たとえば大学は「そのプログラム、その支配、その強制によって、その組織の再-生産を保証することを目指すシステム」(VM, 26/25)として語られる。とすると、現代生物学においても学校制度の記述においても、再生産を指令するシステムという意味の外縁——デリダの言い方では「隠喩的構造」——が「プログラム」という概念を枠づけていることになる。では、「プログラム」という概念をめぐるこうした枠組みをどう考えるべきか——こうして彼は、ジャコブの『生き物の論理』とニーチェの「私たちの教育施設の将来について」をとおして、「プログラム」という概念の枠組みを検討していくと予告する。

講義の各回もこの3つの内容におおむね沿ったものとなっているが、考察の順番は③→①→②の順になっている。講義第1回～第3回は、ニーチェ、ジャコブ、カンギレムに依拠しながら生物学と大学教育におけるプログラムの問題を扱い(内容③)、第4回～第6回ではジャコブに焦点が絞られ、ヘーゲルの生命論やマルクスの再生産論を交えながら、生き物の増殖(再生産)の問題が考察される(内容①)。そして第7回以降で、ニーチェ、フロイト、ハイデガーの三人をとおして、弁証法的な同一化とは異なる生死の「他なる論理」が模索される(内容②)。編者が述べるように、第2回のニーチェを論じた箇所は後に『耳伝』(1984年)として、第8回～第9回はガダマーとの討論で知られる「権力への善き意志」(1986年)として、第11回～第14回は「思弁する——フロイトについて」(『絵葉書』所収:1980年)として公に発表されることになる(VM, 13-14/12-13)。

以上が、『生死』全体の流れである。これを踏まえると筆者が翻訳を担当した第11回と第12回は内容②、とりわけフロイトとニーチェの関係を考察するパートに属する。そこで次に、内容紹介も兼ねて、第11～12回でどのような議論が行われているのかを概観することにした。

生死をめぐる三つの環

すでに見たように、講義第1回で予告された内容①～③のうち②では、ニーチェ、フロイト、ハイデガーをとおして、それまでとは異なるかたちで生死を語る仕方(「他なる論理」)を模索することが主な論旨となる。ところで、この問題に本格的に取り組むうえで、デリダは次のように語っている。

私たちの最初の問題設定においてニーチェから——生死から——出発して、私たちは(生の現代科学を経て)環ないしリングのうちに巻き込まれなければなりません。その環の結び目、接合部が私たちを今日再びニーチェへと送り届けるのです。私たちは、ニーチェの生死から、もうひとつの(ハイデガーの)環-リングを記述していきますが、この環ないしリングの接合部、結び目は私たちを生-死へ連れ戻し、それからもうひとつの(フロイトの)[環-リング]へ連れていくのですが、そうして春になるでしょう(VM, 184/175)。

ここでデリダは、生死を語るための新たな身振りを模索するうえで参照することになるニーチ

エ、フロイト、ハイデガーの3者を「環」のイメージで語っている。「環」の原語であるフランス語の «boucle» は「バックル」や「留め金」「輪の結び目」という意味で用いられる言葉である。要するに、ニーチェ、フロイト、ハイデガーの3者を、相互に連結した3つの環に見立てたうえで、ひとつの環を取りあげることは必然的に接合部を介して他の2つの環に向かうことになる、というわけである。以降でデリダは第一の環としてニーチェ、第二の環としてハイデガー（のニーチェ解釈）、第三の環としてフロイト（とニーチェ）を取りあげていく。ここからもわかるとおり、内容②ではニーチェを中心としつつ、ハイデガーとフロイトを迂回しながら生死の問題を考察するという構成になっている。

この三つの環のうち、講義第11回～第12回が属するのは第三の環である。すでに確認したように第三の環で検討されるのはフロイトであり、これに対応するパートが『快原理の彼岸』を読解した第11～14回講義だが、そのなかでも第11回と第12回はこのパートの実質的な導入部となっている。では、どのような観点からデリダはフロイトを取りあげているのか。この点について講義第11回の冒頭で彼は、次のように語っている。

私の選別的で篩にかけるような読解 [lecture sélective, criblante] は、本質的にこのテキストの非-定立的、非-主題的な構造を現れさせることを目指しています (VM, 275/263)。

この箇所ではデリダは、自分の『快原理の彼岸』読解の狙いが、このテキストの「非-定立的、非-主題的な構造 [structure non positionnelle, non thématique]」を現れさせることだと述べている。ここで「非-定立的」という表現は、ヘーゲルの定立の問題を想定してのものだと思われる。講義第1回の冒頭で語られていたように、デリダはヘーゲルの定立概念のなかに、対立物（死）との関係をとおして生が自己を措定（定立）していく弁証法的な同一化の論理を見ている。この点で、「非-定立的 [...] な構造」が指すのは、講義第1回で語られていたような、弁証法的な総合とは異なる仕方で語られる生死の「他なる論理」であり、先の引用が言わんとしていたのも、その論理を『快原理の彼岸』のなかに読み取ることが今後の講義の主旨である、というわけである。

ここからデリダは、生死をめぐる「他なる論理」もしくは「非-定立的な構造」を「自己の生を書くこと (auto-bio-graphie)」ないし「自己の死を書くこと (auto-thanato-graphie)」として考察していくことになる。ところで彼は、『快原理の彼岸』を読解するうえで、フロイトの「レトリック」に注意を向けている。

ここで、フロイトのレトリックに注意を向けなければなりません。レトリックとはつまり、彼の舞台設定や身振り、動きであり、さらにはある手続きを篩にかけ、選別するような能動的な戦略であって、この戦略は科学や穏健な哲学の規制を受けてはいません (VM, 288/274)。

ここで明確に語られているように、デリダが「レトリック」という言葉で想定しているのは、戦略的で行為遂行的な言説の身振りである。彼によれば、言説や理論の内容は中立的で透明なも

のでは決してなく、ある特定の状況（行政、職場、学校、専門家集団、出版社、家族関係など）との力関係のなかで著者がなにかを篩にかけるように、あるものを選択するとともに他のものを排除するという戦略と不可分であり、そのことは、言説の枠組み（舞台設定）や言葉遣い、あるいは自身の言説を補強する際の例示のなかに現れている。1977年の論考「スクリッブル」のなかでデリダはウォーバートの『エジプト人のヒエログリフに関する試論』に依拠しながら、「[… …] なにかを選び、選別し、一方を好み、価値評価し、ヒエラルキーを作り、選出するような機能」(S, 8/ 12) としての篩 (crible) を語ったが³、1975-1976年度の『生死』においてはその発想がすでに姿を見せていると言えよう。

こうしてデリダは、『快原理の彼岸』の舞台設定、その言説の流れと身振り、その背後にある利害と戦略を問題にしていく。吉松覚が「訳者あとがき」で述べるように⁴、第11回では、主に『快原理の彼岸』の第1章が取りあげられるが、その際に彼は、哲学を回避するというフロイトの身振りに光をあてている。デリダは1925年の「自らを語る」を取りあげながら、ショーペンハウアーとニーチェをとおして哲学を回避すると同時に思弁に向かおうとするフロイトの両義的な態度に着目する。デリダによれば、これは『快原理の彼岸』における「思弁」という言葉の使い方にも現れており、「思弁」は哲学的な意味での思弁ではないのはもちろん、古典的な実験科学でもないという点で、「哲学にも形而上学にも実験科学にも属さないような反省の概念」(VM, 284/271) を示している。このような「哲学に対する立場表明」(VM, 284/271) との関係から『快原理の彼岸』第1章で快と不快、快原理と現実原理、抑圧を語っていくフロイトの身振りを問題にしていく。

第12回でも引き続きフロイトの身振りに焦点があてられる。『快原理の彼岸』の第2章では、戦争神経症や「いない／いる (fort/da)」という子どもの糸巻き遊びの例をとおして反復強迫に言及されるが、デリダによれば、ここでフロイトは「一見すると数歩も前進しているように見えて、実は一歩も前に進んで」(VM, 299/285) いない。つまり、「いない／いる」の遊びや反復強迫に言及することで第1章から前進しているように見えて、その実、それらをとおしてフロイトは第1章で扱ったような快原理の問題を取りあげ続けているのであり、このように前に進んでいるように前に進まないフロイトの「特異な歩み方 [démarche]」(VM, 299/285) が問題となる。その際、デリダが着目するのは、フロイトの家族関係である。「いない／いる」の遊びをしている子どもとは、フロイトの娘のゾフィーの息子エルンストであり、そこにはフロイトが「家族で場を占めていたような経験」(VM, 304/289) がある。この点で、「いない／いる」についての一連の分析は家族の経験をめぐって「際立って自己の生を書くひとつの物語 [une histoire particulière autobiographique]」(VM, 314/298) でもある。このような観点からデリダは、E. ジョーンズの『フロイトの生涯』を参照しながら、「いない／いる」や反復強迫を語るフロイトの足どり、そしてそ

³ この点については以下の拙論を参照。Cf. 松田智裕『「スクリッブル」を読むために』、『Suppléments』no. 1、脱構築研究会、2022年、152-159頁。

⁴ ジャック・デリダ『生死』吉松覚、亀井大輔、小川歩人、松田智裕、佐藤朋子訳、白水社、2022年、349-350頁。

の足どりを背後から杵づける、家族をめぐる彼の利害関心を問題にしていく。

問題提起

以上を踏まえたいうえで、問題提起に移りたい。あらかじめ断っておくと、『生死』についての筆者の問題関心は、その内容や体系性というよりは、この講義のなかで行われているデリダ自身の身振りにある。そうした観点から、この講義を読み解くうえでの可能な論点を2点提示することにした。

(1) ひとつめの論点はこの講義の第11回にかかわる。すでに述べたように、この回の主眼はフロイトの『快原理の彼岸』読解が主眼ではあるものの、その途上でマルクスとハイデガーとの関連から「脱構築」という言葉について言及されている箇所がある。『快原理の彼岸』でフロイトは、生命を維持する性欲動(生の欲動)と死に向かう自我欲動(死の欲動)の対立を「構築(aufbauen)」と「解体(abbauen)」の二元性に重ねているが、デリダによれば、この「解体」を「フランスの教条的なハイデガー主義者たちは大胆にも「脱構築」と翻訳しよう」(VM, 279/266)としているという。こうした動きに対してデリダは、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』に登場する「解消(auflösen)」という語を「脱構築」と訳出したジョルジュ・ラビカの論文を引きあいに出しながら、「彼ら[フランスのハイデガー主義者]がこの語の占有権を持つわけではないことはたしかです」(VM, 279/266)と語る⁵。

この一連の議論には、当時のフランス思想界の動向に対するデリダの抵抗がはっきりと現れている。デリダの言う「フランスの教条的なハイデガー主義者」が具体的に誰を指すのかは定かではないとはいえ、少なくとも彼がここで問題にしているのは、一方で、『快原理の彼岸』に登場する「解体」という言葉をわざわざ「脱構築」と訳すことで、あたかもこの箇所でフロイトがハイデガーと同じことを語っているかのように見せかける翻訳の機能である。「脱構築」という言葉がもともと『存在と時間』における「解体(Destruktion)」の訳として登場した経緯もあって、フロイトにおける哲学の回避という身振りに光をあてようとするデリダからすれば、それは受け入れがたい翻訳なのだろう。しかし他方で、この言葉がフランスのハイデガー主義者たちの占有物ではないと言われていることからして、ここで彼は、「脱構築」という言葉の所有権をめぐるフランスのハイデガー派に抵抗しているようにも見える。知られるとおり、はじめはデリダも「脱構築」という言葉をハイデガーの言う「解体」の訳語として用いたものの、次第にハイデガーから距離をとり、独自の意味でこの言葉を使うようになる。それを踏まえるなら、第11回の当該箇所でデリダは、翻訳の問題をとおして「脱構築」という語をハイデガーの文脈から独立させようとしている、そう考えることができるかもしれない。

では、こうしたデリダの身振りをどう考えたらよいか。すでに見たように、第11回の冒頭で

⁵ ただしラビカの訳についてデリダは、「脱構築」を、実践的な転覆のない机上の空論に仕立てあげる「あまりに狡猾で少々ひどい策略」(VM, 280/267)であるとも述べている。

デリダは自分の読解を「選別的で篩にかけるような読解」と形容していた。要するに、『快原理の彼岸』をつうじてフロイトの身振りを検討するというデリダ自身の読解もまた、なんらかの利害を背景としており、取捨選択をとまなう戦略的なひとつの態度決定であるというわけである。そして、フロイトにおける哲学の回避に焦点をあてる途上で先ほど確認したような翻訳の問題についての言及が登場することをあわせて考えるなら、フロイトのレトリックに着目するという解釈の方針そのものがフランスのハイデガー主義と無関係ではないということになるのだろうか。

(2) ふたつめの論点は、『生死』と学校教育の問題にかかわる。冒頭で確認したように、この講義はデリダが GREPH の活動に参加していた時期のものであり、彼はアグレガシオン制度をこの講義の主題にしていた。このような流れをみると、『生死』において学校教育は決して外在的な問題ではなかったことがわかる。本稿の第一節でも見たように、学校制度の問題はプログラムや再生産という主題をつうじて内容 ③のなかに組み込まれている。この講義と同時期に書かれた論文「教員団体はどこではじまり、いかに終わるのか」（1976年）でデリダは、当時自分が ENS で職務についていた復習教師を例にとりながら、省庁や各種委員会をとおして国家のイデオロギーを再生産し、「教育全体を厳選し規範化する諸機構」（DP, 126/ (1) 113）としてのプログラムを語っていたが、これもまた、『生死』と響き合う問題だろう。そして、この問題が『生死』において生死の「他なる論理」の問題とゆるやかに連結していることも考慮するなら、学校教育は GREPH の活動をしていたデリダが余談として授業で言及した話題では決してなく、むしろ『生死』全体の議論構成にかかわる中心的な主題のひとつだったと言えるだろう⁶。

とすれば、この講義において「生死」と「学校教育」という二つの主題がどのようなバランスで共在しているのか、が当然問題となる。そのヒントとして、デリダが講義でたびたび触れる「自己の生を書くこと」という主題を挙げることができるだろう。この主題は、教育制度の観点からニーチェの「私たちの教育施設の将来について」を取りあげた講義第2回ではじめて登場し（Cf. VM, 48/ 46）、それがフロイトを論じた第11回以降で重要なテーマとなっていたことはすでに見たとおりである。ところで、興味深いことに、1977年の GREPH の論集『誰が哲学を恐れるのか』に掲載された論文「ヘーゲルの時代」のある注には、当時のデリダが取り組んでいた19世紀フランスの哲学教育についての研究（ヴィクトル・クザンとヘーゲル、イデオロギー学派とコンディヤック）の一環として、「1975-1976年度に行ったニーチェと教育についてのいくつかの研究」⁷が

⁶ たとえば、デリダは『生死』の第1回で次のように述べてすらいいる。「私のタイトルにおける、セミナーのタイトルにおける〔「生と死」の〕との保留は、今年度、とても伝統的に、「生と死」——まず生、次に死——〔というタイトル〕を冠するアグレガシオンのプログラムへの、とても控えめな——さほど暴力的でない、とみなさんは言うでしょう——介入を構成しています」（VM, 25/24）。ここで語られるとおり、アグレガシオンの主題であった「生と死」から「と」をとって「生死」としたのも、アグレガシオン制度への「とても控えめな [...] 介入」の一環なのであり、この点で、この講義において生死という主題の設定そのものが教育や制度の問題によって成り立っていると考えることができる。

⁷ GREPH, *Qui a peur de la philosophie*, Paris, Flammarion, 1977, p. 76n1.

行われ、近く出版される予定だと記されている。もちろんこれは、後に『他者の耳』として出版される『生死』の第2回講義のことである。とすれば、「自己の生を書くこと」という主題も、当時の GREPH の活動の延長線上にあるということになるだろう。では、「自己の生を書くこと」を生死と学校教育をつなぐ結節点と考えた場合、生死と学校教育という二つの主題の関係をどのように理解できるのか。この問題を検討することは、『生死』を当時デリダが取り組んでいた哲学教育論の文脈から位置づけることにもつながるだろう。

略号

デリダの著作からの引用は、以下の略号とともに頁数を原書・日本語訳の順で記す。

Jacques Derrida,

DP : *Du droit à la philosophie*, Paris, Galilée, 1990. [ジャック・デリダ『哲学への権利 1』西山雄二・立花史・馬場智一訳、みすず書房、2014年]

S : « Scribble (pouvoir/écrire) », *Essai sur les hiéroglyphes des égyptiens* de William Warburton, traduit par Léonard des Malpeines, édition et notes par Patrick Tort, Paris, Aubier Flammarion, 1977, p. 5-43. [ジャック・デリダ『スクリブル——権力／書くこと（付：パトリック・トール「形象変化（象徴的なものの考古学）」』大橋完太郎訳、月曜社、2020年]

LM : *La vie la mort. Séminaire (1975-1976)*, édition établie par P. -A. Brault et P. Kamuf, Paris, Seuil, 2019. [ジャック・デリダ『生死』吉松寛・亀井大輔・小川歩人・松田智裕・佐藤朋子訳、白水社、2022年]